| 別名 | 石川香山『陸宣公全集釈義』と尾張藩天明改革の時代 □
| 18世紀後半における江戸期日本と清朝の政治文化(上) |
| 作者 | 田中 秀樹 |
| 出版物 | 書物・出版と社会変容 □ □ □ □ |
| Type | Journal Article |
| Text Version | publisher |
| URL | http://hdl.handle.net/10086/23291 |
石川香山『陸宣公全集釈義』と尾張藩天明改革の時代

十八世紀後半における江戸期日本と清朝の政治文化（上）

田中秀樹

はじめに

本論は、石川香山の『陸宣公全集釈義』二十四巻（以下、これを『釈義』と略す。及びその増補改訂版『陸宣公全集』以下、これを『全集』略す。）という書物が著された背景を、十八世紀後半における尾張藩の政治的状況や政治思想的様相の中から見出すことを目的とする。石川香山（元文献文化七年、一七三六～一八〇九年）とは、細井平洲、岡田新川に続いて藩校明倫堂の督学に就任した尾張藩儒として知られ、学派は閑齋派朱子学に属す。『釈義』とは、彼がまだ藩儒に召し抱えられる前に安永三年（一七七四）に上梓した、中国唐代の宰相陸贄の奏議集『陸宣公全集』（1）の注釈書である。陸贄（七五四～八〇五）は、唐朝危難の時に対し、宰相として国家を立て直し、暗喫な皇帝徳宗に対して諫言を懸らなかったため、太宗朝における魏徵とは別に唐代の忠臣・名臣の代表としてならび称されている。この『陸宣公全集』という書物が、各地域の時代においてどのような政治的環境下に受容され、読まれてきたのか、そして人々はそこから何を学び得たか、を明らかにすることで、各時代における政治思想の特質を論じようと考えている。前稿でもすでに述べたように、まず注目したのが、十
それらの考証学がその動機と方法に於いて、きわめて類似している。という指摘である。それはも
少し時代の下った寛政から文化・文政期における日本考証学にも見られる。金谷治氏によれば、たとえば大田
錦城（「二六五」、「八五」）が「九経談（文化元年刊）」
で展開した「尚書」研究は、清朝考証学者の方法と結論
とが似ており、また清人の成果が大量に輸入されたこと
によつて、当時の江戸人も清朝考証学との「暗合」
は非常に気にしていたという。他にも「近世清人の廻見
所と暗合する者多し」（先哲叢談総篇」といわれた吉田
篁墩（「四五」、「七八」、「暗合」）はよくあることだ
といった猪飼敬所（音韻・文字学では山梨稲川（「七七
一・八六」）や松崎懸堂（「七七・七八四四」）も清
朝考証学者と類似の研究を残したことで知られている。

このように、これまでの研究は江戸期日本と清朝におけ
る学術の「暗合」に、関心が向けられてきたようである。
その意味では、十八世紀後半の清朝と日本を訪れた朝鮮
知識人が、各々の地で「情の世界」を体験していたこと
を明らかにされた夫馬進氏の研究も、「やはり日中におけ
る一種の「暗合」に注目された研究である」といえよう。
第一章 石川香山の君臣論と「陸宣公全集」

それでは、なぜ石川香山は「陸宣公全集」に注釈を付けて出版しようと考えたのだろうか。彼は「釈義」自序で次のようにいう。

余結髪して読書を知り、深く学術の隆盛のを概く。古人の枠を捨て不朽に因るを得て、之を事と見わさんと欲するは、大道の用を開明せんとするを以てなり。すなわち、漢より唐に至り、反復しを求むれば、或ものは事を行う有るも、言を立つる無く、或ものは言を立つる有るも、事を行う無し。事と言と両つながら存する者は、ただ陸宣公の時文を亡ばんことを欲せず、公の集を賜し以て経芸の鼓吹と為すなり。天らず、君子なり。」「論語」秦伯なる者なり。天在下は斯文を亡ばんことを欲せず、公の集を賜し以て経芸の鼓吹と為すなり。而れども其の全集、吾土に未だ検せず、故に之と同に懸注し、と共に枠を捨て不朽に因るの道を学ばんと欲するなり。...
羽翼 "という指呼、経書に準じる価値を与えている。

要するに、香山の意図とは、陸賛を士たる者の理想と
し、上は天子に負かず、下は学ぶ所に負かざる人材の
育成を期す、という点にあったのであるが、もし我が国
史上同様の人を産ずとするならば、それは橘正成である
という。香山はのち、寛政版『全集注』一部を橘正成を
論じて『智仁勇の三徳』を兼備した『百世人倫の師』と
評しており、中国の陸賛と日本の橘正成を等しく「道」
を理解した者と見なし、士たる者の理想像として示し
ているのである。

では、香山は具体的に陸宣公全集』のどのような内
容に共鳴したのだろうか。ただ、前稿で例論したように、
石川香山の注釈は、第一に古語占言の出典を探し、その
注釈だけを読んでも、そこから香山の政治思想や政治
の著書である『陸宣公全集』が持つ政治思想との関
係を探り、また周辺の人物の思想とも比較することで、
読み取れる思想と『陸宣公全集』が持つ政治思想との関
係を探り、また周辺の人物の思想とも比較することで、
当時における彼らの注釈の位置を明らかにすることとす
る。

この考察の対象として最も相応しいのが、『人主之職』
という書物である。この書は、君主として心掛けること、
戒めること、取り組むべきことを箋書きにしたもので、
おそらくその内容から藩主よりは世子教育のために書か
れたのだろうと思われる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困窮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困縮させる様に
したまぶべき事肝要なる。確かに、香山には、人の上たらん
身の者は、『顔子のごとき』賢君を困縮させる様に
したまぶけれども、詳細にうつ
記事があることからも、このような機会にあわせて著した
ものではないかと思われるが、序跋もなく、詳細につ
いては不明である。蓬左文庫を唯一、自筆本を蔵するの
みである。それでは、内容から特に香山が強調したと考
えられる『民の父母』、『人材の登用』、『学校』、『下情を尽く
す』『綱説』に分けて、石川香山の君臣論を考察してみた
し。
玉フクト不能ヘニ、人主ヲ建テ天二代ヲ糧国ヲ民庶
ヲ治メタ、各其ヲ治セム、是ヲ人主ノ職ト云。各
其所ヲ治セムとは、易ノ（繁辞下）ニある、包犢其
所ヲ治セム、も、人主ノ職ト云、各

人主ノ職ニハ議論ヲ展開スル。そのために、万民ヲ安

人材ノ登用

さて、君主ガ「民ノ父母」として万民ヲ治メルために
重要ナルモノ、有能家ニ登用ス。君主ヲ治メルために
ノ思想ヲ有スルモノニ、民ノ父母ト云。君主ヲ治メル

]]
職
代玉フラクラスクルモノハとして、「臣」とに対し
ても重大な責任を与えていることを意味する。「士」とは、
その者で、「国土民方治ムルスニシミナクモノハヘリ」の
ように、配下の者を常に重くの負うのであった。君
耳目には代わって配下の者を見出し、必要とする職務を担
う。それはまさに扇の要の如き存在であり、要路を
得なければ、諸職全てを乱されることとなる。また要路以外
の諸役が綱の目のように張り巡らされ、一つ一つは些
細な存在であるが、一目破れてしまうと、網にかかった
事は皆出してしまうので、諸職トモオロカニす
る事はできないのだという。

このように、如何に「ウズモレヤスキ賢才」を出すかを重視
するのいか、以下の議論も、どのように名無しに
在るかを重視するのか、またはその反対で、如何なる人物を用い
てはならないのかに向かう。その内容があまりすっきり
とまとめていなかったため、そこでそのすべてを紹介す
ることはできないが、その一端を示せば、たとえば、「タ
善ヲ好ミ、ノ材ヨ己カ身ヲ有テコト、喜ハルミ」

は、侯子孫万民ヲ、安楽ヲ持テ良臣デあり、逆に「人
己ニ勝ル材デアルモノヲ見テハ、姫姫ヲサマシラ、ヘ
ル」者は、「子孫ヲ亡シ、国ヲ覆ス」とある。「正直アル人」と
は、二、「飾ツヤアル人」は、「頼リナイ」ならず、正直ナル
人ノ目ニ見出し、職務ヲ為すウソツノ如シ、リハ
薄ニシテ知徳短キ人ノ目ニ見出し、職務ヲ為すツノ如シ、
自分ノ材ヲ賴むテ、人ヲ賴むツ事ヲ為すテ、勝れた者は
材ヲ賴むテ、人ヲ賴むツ事ヲ為すテ、勝れた者ハ
呉ニシテ知徳短キ人ノ目ニ見出し、職務ヲ為すツノ如シ、
自分ノ材ヲ賴むテ、人ヲ賴むツ事ヲ為すテ、勝れた者ハ


（三）学校を建てる

「人主及び臣民天二代レル職分ヲ行ヒ至ヨタビルハ、古ノ聖賢ナリ」というより、天から人主ト臣民ニ与えられた職分を行い尽くした理想像をハ「聖賢ナリ」とする。現ノ藩主ト藩士モノ、今ノ「聖賢ナリ」ニ手本として、そうなるべきことが要求される。これは「末代君賢」となるにはどうすればよいのか。それは『朱色君賢』と云ふ、ここに於て、その道ヲ学ぶための場として「学校」ヲ設け、求める方針ヲ立て、朝ノ職分ヲ学ぶことを強調しておきた。均等に含有レサルハ「聖賢ノ道」ヲ学ぶほかない。

（四）下情を尽す

さて、君主ヲ政策ヲ発する「民ノ父母」として「仁」ヲ本としたけれども、このように、「士」の教化ヲ通じ、武備ヲ研鑽するために、学校ヲ期待されてゐるのであつ、学校ヲ設立スル君主ノ立場ニ对于ては先述ノ如シ。香山ハそれに続いて、「民ノ父母」として「古明」ヲ朝ヨリヲ二三マテ、唯本土ヲ民ノ為ニ御心ヲ尽セテ玉ヘリ」といは、それで、それヲ誓へて、一堂ニ集まつて宴会ヲ行ふ時に、その中ノ一人が隅に向かつて泣
悲しんでいると、みな興が失せて楽しめるようなものであるということ。すなわち、現実に国中を存在する「難
義情アレトモ、上へトクル障閣、乃八鬼ノ難ニ
枉ラレ、怨ヲ吐クヲスモノ」は、この隅に向かって
泣き悲しむ者である。だから、このような中にある
君主が安然と楽しむということがあってはならない。こ
に『下情を尽す』ことが、君主の職務として重視され
る。

人主下情ヲ尽知リ玉ヲヲ以テ、務トナシ玉ヲ
ベシ。下情トハ一家中ヨリ、国中万民スミくマテ
ノハヲスハ、色々御心ヲハリテ、掌ノ上ニ見カ如
クニナシヲトナリ。

『下情ヲ尽知ふるから、国中万民に関する情報
を知ることが、民の父母」として民をかわす恵むとい
う『仁』を施す前提となる。古の天子が、天下に従じ
て民の様子を見たり、国風歌謡を取って民風を観察した
もので、この『下情を知る』ためである。そのため、君ノ
御心下々臣民ニユキヲタリト、コラリナク、又臣民ノ
情を知るための『下情を尽くす』こととは、国中万民
との関係を理想的な関係とする。

このように、古代の聖人の時代は必ず下情を知ること
に尽力したのであるが、後の時代の君主は「神明ノ様ー
に振る舞い、臣下・万民との関係が疎遠になることが多
い。香山は、これはなぜ国家衰亡の原因であるかという
そこで、こうならないように、殷では次のような法を行
ってもとい。

殷ノ法ハ太因子内八民間ニ置、民ト農業ヲセシメテ、
下情ヲ尽知シラシメテ、後ニ帝位ニ絞ケシ事ヲ
ニ見ヘリ。 高等王モ祖ヲモ部屋住ノ中、皆民
間ニ居リ玉ヲコトヲミユ。去程二殷ノ世ホド賢王
多出玉ハシハナシ。是全能下情ヲ知リ玉ハルヘ
リ。

殷では制度として太子を民間において、民と農業を
そこで、下情ヲ尽シテ。下情ヲ尽シテ。下情ヲ尽シテ
ルユカナリ。シカラハ本宗ヲ納フシテ、庶子ヨリ入
テヲ納フ君ヲヨキモノナリ。是ヲ庶子ノ時小身ノサ
ン。
「レデヲノ情ヲ知ラル」故ナリと、創業ノ君主や庶子出身ノ君主ノ多くが明ヲナルも、やはり帝ナノ

香山は続け、中国ノ皇帝のなかでも漢の高祖と宋の仁

スハ、ムモノナレバ、朕ナノ半破ヘモノヲアラスト

ニルト云ハ心顔色ニ見ルノハ、志ヲアルト望

ヲ絶テ退キ、タメ説言バカリ耳ニトテ国敗亡ノト

ナルコトラトカル如リ。昔ヨリ明王ノ虚心ニテシテ

下ト隠ヲ納ハナシ。
この君臣論を体系的にまとめた性質の書物ではないが、先述した『人主之職』と同様の要素をそこから見つけることは、難しいことではない。

例えば、『民の父母』については、貞元八年（七九二年）秋七月の河南など四十余州を襲った大洪水に際して、遠やかな救恤と租税の減免を求めた上奏『請遣使臣監撫諸道遣水州懸状』の中で、『礼記』孔子問居の一節より、子夏孔子に問うて曰く「如何なる効に人の父母と謂うべし」を引用している。ここでは、李世民の「民・字の忌を避けるために、人の父母」とするところである。

陸贄は引用するが、本来は「民の父母」とするところである。陆贄は『旧唐書』列伝において、未來の事の以て己の任と為す志、すなわち未来国家に対する気概と責任意識を持ち合わせた人物として称されており、香山も注釈においてこれを引用している。これはまさに香山が「人主八天二代下民撫育玉禽民父母トナラセ玉邦御身」というに完全に一致する。
このページは、現在のテクノロジーを利用して解読するための準備が足りないため、自然読むことができません。
第二章 石川香山の理念と尾張藩政改革

では、これまで見た石川香山の理念は、十八世紀後半の尾張藩という歴史の現場において、どのような状況に置かれていたのだろうか。結論からいえば、彼の理念は孤立的で存在していたのではないと考えられる。しかも、当時の尾張藩という領邦国家を主導していた領主層に支配的な君臣関係の理念とは一致していたと考えられる。より具体的にいうなら、藩主宗睦の治世に展開された尾張藩の天明政の改革を推進した執政人見隆邑、および藩政改革の象徴である明倫堂の初代総裁（督学）であった細井平洲が、藩政改革にあたって主張したのが、同様の君臣理念であった。その後も、そのため「統義」の意義を出し、藩費に補助を与えた。したがって、この書の出版を支援した人物こそ、人見隆邑であった。

それでは、彼らが改革主体として活躍した当時の尾張藩主の一人である金子俊光宗睦について述べる。享保十八年、尾張藩主の位に就いた彼は、藩政改革を推進するために、細井平洲の理念に則り、藩政改革に取り組んだ。藩政改革の推進にあたって、金子俊光宗睦は、細井平洲の理念に則り、藩政改革に取り組んだ。

宝暦十一年（一七七一）、第八代藩主宗勝の死去に伴い、宝暦十三年（一七八三）の藩校明倫堂開学時に香山が典籍とし、三年（一七八三）の藩校明倫堂開学時に香山が典籍として揃えられる。
第1節 人見璃瑠の思想

人見璃瑠（一七九九－一八七七）、名は乗、字は叔魚
通称は弥右衛門、璃瑠はその号であり、また竹山とも号す。その伝記については、まずは名古屋市史三の人物編に基づき『僚吏』によつて知ることができる。[32] 古くは塩川柳人
の小冊子『人見璃瑠』があり、その概略を知ることができるが、塩川の著作の流通量は非常に少なく、人見の伝記や思想に関する専論も決して充実しているとはいいえない。[33] そこで、人見璃瑠と総裁細井平洲で
実施における役割や、細井平洲の招聘など、人見璃瑠が重要な働きしたこと、周知のところである。そこで、続いてまず人見璃瑠の思想と石川香山との関係を述べ、その後で細井平洲の思想についても論じることとする。

岸野氏の研究によれば、人見璃瑠の家系は本来、人見
竹洞（名は節、字は宜卿、通称は又七郎、友元、一六三
八－一六九八）が寛文元年（一六六一）に幕府儒者とな
って以来、人見行充（璃瑠の祖父）と美至（璃瑠の父）
在下と代々幕府儒者を世襲する比較的高禄の家であり、朱子学を重んじる「徳川一門の帝王学の教祖群」であったという。璃瑠は尾張藩に
登用されるきっかけとなったのが、父美珪の弟である美
雅（一六八九－一七八三）が宗隆幼少時の教育担当とし
て少傅兼侍読となり、さらに璃瑠がこの美雅の養子とな
「近世ノ賢明」であると黒鶴は評価する。そして、
執政の堺平太左衛門を登用したことについて、
堺平太左衛門は、「時四十余二、ヨキ
役人ト世上トモハルコト也。重賢卒後モ此人執政モ
トノ如シ、夫ユヘ国政モ動カサリシ、此人家老ト
ナリシ已後、重賢ハ大圏、日本詩歌エキ、糸竹・田犢ナ
トシ、正ク南面スルコトノミト云ナリヲトシ、重
賢ニ賭代処不慧もケレドモ、国事ヨク治シハ、全
ク堺平徳トムヘリ。

という。つまり、黒鶴は黒藤の国政を現実的に動かし
ていたのは、堺であり、藩主重賢は「正ク南面スル」の
みであったし、次君（細川治）は「不慧」であったけ
れども、よく国政が治まったのも、やはり堺の功績であ
るということ。実際、近年の吉村雄雄の研究によれば、細
川重賢は「編後ノ風風」と評される中藩政改革を主導
した明君の一人として知られるのであるが、ただ不思議
なことに、重賢の数多い改革事績を見事の政策過程にお
いてほとんど確認することはでき（頁7）ず、「反面、
重賢の学問・趣味など、いわば非政治的な活動は実に多
彩である」（頁14）。こう考え、堺平太左衛門「執政'
下の改革政府のもとで藩主個人の資質が発揮される政治
が明君として種々語られてきたことについて、当時から重賢
に注目したいのは、『日本詩歌・糸竹・田犢ナトシ、正ク南
面スルコトノミト云ワノ天道をも「近世ノ賢明」
とする黒鶴の理解である。藩主がたえせん権を執政に「御
委任」としたとしても、「近世ヲ賢明」ではないという
為政評ではないかsemblesのである。
以賢臣というふものなければ、小人・婦女にたまされて、每事つとめて暮す也。されど、其明敏をたのみに用すれば大害あり。然らば、相世の君は如何して可ならん、祖宗の法制壊しざる様に守り、二の賢臣を師とし友とするにしはなし。

少年の君主は、『黄帝たんたん』ながら、直は不順、事変は不経ということになってしまい、世経の君主が、下情に通じることを求める。

武諸芸共に、世の中の為、群下の為と云目当あらば可なら、ことは賢臣を近づけ、「師とし友とする」べきであるという。陶は、『文武の芸』に遊ぶことが推奨されているので、そのような事件も、様々な特色特徴のある臣下を「耳目手足」とすることができる。"文武の芸"にも遊んで、時務に通じ、下情をしる事を勤める。
第二章 細井平洲の思想

尾張の天明寛政改革における重要人物といえば、細井平洲は生まれた。尾張国知多郡平島村（現在、愛知県東海市新洲）生まれで、通称は三郎、平洲はその号で、別名如来山人とも号す。尾張国知多郡平島村（現在、愛知県東海市新洲）生まれの尾張寛政改革における重要人物といえば、細井平洲は生まれた。尾張国知多郡平島村（現在、愛知県東海市新洲）生まれで、通称は三郎、平洲はその号で、別名如来山人とも号す。尾張国知多郡平島村（現在、愛知県東海市新洲）生まれで、通称は三郎、平洲はその号で、別名如来山人とも号す。尾張国知多郡平島村（現在、愛知県東海市新洲）生まれで、通称は三郎、平洲はその号で、別名如来山人とも号す。尾張国知多郡平島村（現在、愛知県東海市新洲）生まれで、通称は三郎、平洲はその号で、別名如来山人とも号す。尾張国知多郡平島村（現在、愛知県東海市新洲）生まれで、通称は三郎、平洲はその号で、別名如来山人とも号す。尾張国知多郡平島村（現在、愛知県東海市新洲）生まれで、通称は三郎、平洲はその号で、別名如来山人とも号す。尾張国知多郡平島村（現在、愛知県東海市新洲）生まれで、通称は三郎、平洲はその号で、別名如来山人とも号す。尾張国知多郡平島村（現在、愛知県東海市新洲）生まれで、通称は三郎、平洲はその号で、別名如来山人とも号す。尾張国知多郡平島村（現在、愛知県東海市新洲）生まれで、通称は三郎、平洲はその号で、別名如来山人とも号す。尾張国知多郡平島村（現在、愛知県東海市新洲）生まれで、通称は三郎、平洲はその号で、別名如来山人とも号す。
人のためをたすけます。ことであるという。すなわち、家臣が利氷を克服することとし、家国の上を存じ四面下向をとく心、家国永久の謀」を図ることである。君主の役目であるという自己覚は、単なる国家の一機関として、官の功のみを追求すればよいということではない、むしろその対応に、家国全体、永久に対する自己覚と責任を有する個々の臣下に要求するものなのである。これは、先述した「仁」や「オトナキ心」を持つ者の、君主としてのためのものである。平済はこの世界、上なる者が下なる者を「雇ふ」関係で成り立っていると考える。すなわち、最も大きな次元では、「天地の妙用」が「聖徳の天子」を雇い用いており、天子が諸家老諸役人が飯持仲間を雇い、下の者は上に対して「奉公の働を助け」という。そして、その構造と同様の関係を人において見ると、心応が手足を、手足が大指、中指、小指の手伝いを雇っているのと同様であるという。そこで、「 Tribute」の手伝いを雇っているのと同様であるということ。心応が手足を、手足が大指、中指、小指の手伝いを雇っているのと同様であるという。そこで、「 Tribute」の手伝いを雇っているのと同様であるということ。
声高く利害を申合、無腹直言を尽し、存念候胸中忌み
嫌ひなく申上ることである。臣下も、「上下一統に君上の御
内を明白にしておくことができ、ここに、「親敷君
臣の間」が醸成される。

そして、「公論公評」の重視が、昔より人君は諫諍の
臣を宝に被急事に御座候」という。臣下の忠諫、君主
の納諫の重視につながるのは明白であろう。「人君も幼
年よりしばしば諫諍の臣に仕こまれぬ為、折々赤面
を被成候程の人がいつても名君賢将に成玉ふことに御
座候」。古今の名将賢君と申程の人は、この苦口を
きく人を秘蔵され候、甘みを申家来を厭ひ嫌れば候
事に御座候。というように、「諫諍の臣」を置くことが
見られる。平洲は、当時実際に、「公論公評」が行われ
ず、「内密内評」によって政策が決定されるのが通例であ
ると理解していたのであるが、そこにみられるのは君臣
・群臣相互間の「人々の心根」まで、「水くさく成りはて」
何事もかくしつつ、遠慮会釈を能仕候を敬すと心
得、婦人女子のかたがけにひそめき合候様」となった「誠

得婦人女子のかたがけにひそめき合候様」となった「誠

や義合。同役は他人」であって、「元来関心」に
り間に合わせて候心になっては、これらが「政

令行はれ家国富強」の実現を阻む最も大きな要因なので
ある。そこで、「親敷君臣の間」は、「水くさく」
ない群臣関係を

どのように構築するのかが、平洲にとって、問題の核心とな
のであるが、そこには現実的に厳然と存在する上下関係に隔たる君臣および家臣団内の身分関係がそれを阻むこともあり、もちろん、それは当時の幕藩体制の根幹に拘わったものであり、完全に社会の隅々に設定された身分関係をすべく破棄すべきであると、平沢が考えていたことがわからせる。家老大臣一統に申合候で、一月三度観政事に
予備候職の役方一席に会合致し、講書等致候
跡には四方山の事政事の心得にも可相望を致し
上座執政の人もかはるる立候の酌をいたし、末々役者へもたべさせ申候程に一堂の上にて意観なく
もひおはひの了箇を申談し、是非邪正の評議を公

たとえば、家臣団内の上下関係を一旦リセットしてしまおう。装置として、酒宴の場が持ち出されている。平沢は

その節家老大臣一統に申合候で、一月三度観政事に
予備候職の役方一席に会合致し、講書等致候
跡には四方山の事政事の心得にも可相望を致し
上座執政の人もかはるる立候の酌をいたし、末々役者へもたべさせ申候程に一堂の上にて意観なく
もひおはひの了箇を申談し、是非邪正の評議を公

やるためには、君臣関係においても主張され
下身分関係を放棄したところでは、政治を語りたいという
欲求を読み取ることも、あからさまは違いないであろう

また、同様の欲求衝動は君臣関係においても主張され
下身分関係を放棄したところでは、政治を語りたいという
欲求を読み取ることも、あからさまは違いないであろう

それは「聖賢の君」になるべき「学問」の場において
問題となる。通常「軽い分身の人」は、学問上の師匠
と朋友と同様親しく問答をもし、心やすく論議するの
で、師匠とも「心もとけ」「もつまじ」となり、朋友とも
気軽になく、是非を争い、学問ももしろしくなる。しか
し、貴人ともなれば、師範として家来であり、まして学

25
むて、その君主に対する友愛の念、万民に対する憂え、
そしてその忠慎烈の気を評している。それは、まさに
璃邑や平洲が改革主体として執政大臣以下諸有志の家臣
団に要請してきた資質である。そして、興味深いことに、
『巻義』を読むことで、下なる者（臣下）は、その好む
所を嘉して以為君に事うるを知り、上なる者（君主）は、
能く其の好む所を葡萄牙して民に臨むことを期待している。
つまり、璃邑は藩政改革の姿勢についても期待している。
それには、璃邑の学徳に慕って、
きた小泉侯、すなわち大和小泉藩主片倉若松（一四四〇）
に儒臣岳某を通じて『巻義』一部を献上し
一八五に儒臣岳某を通じて『巻義』一部を献上した
ことを也、すなわち大和小泉藩主片倉若松（一四四〇）
に儒臣岳某を通じて『巻義』一部を献上した
ことからも予想される。その詳細については不明であるが、
おそらく璃邑は藩主の読むべき公事に有用
なる書物として献上したのではないだろうか。
また、璃邑は『康済録抄解』で陸譚と徳宗について次
のようにいう。

『忠臣ノ心ノ書』各格や、難有キヨてるも。カール忠

誠ノ臣今ナカラ、夫ヲ沈淪サセンハ、德宗ノ実徳ト
志を持ち、「国家の善悪」を図り、「細民疾苦」を顧みる役人が求められた時代において、十分その理想を実現することができたであろう。このように見ても、人見璃邑が「陸宣公」を著した香山を「陸家の孝子」、「国家の忠臣」、また「順夫の功、陸子の下に在らず」と大いに評価したことは、璃邑と強烈な反風従の石川香山とが結びつくことはありえない。その両者を結びつけたのは、尾張が藩政改革に向かう当時における、彼らの時代に対する危機意識であり、またその意識を士合として上に追求された名君賢宰的理論であった。

陸宣公全集の注釈や書かせ、人見璃邑にその重要性と有用性を気付かせた最も大きな要因であるといえよう。

第三章 藩政改革の理念と君主によるその受容

人見璃邑が陸贄を天下の志のある忠臣と評していることからも、陸贄のあり方を士の理想像とし、陸宣公全集を臣下の必読書とする価値観が受容されたことは明白である。ただ、詳細は別稿で論じることになるが、中国南宋の事例に見えるように、陸贄の奏議を君主に読ませると物が、君主たる藩主側に実的に受け入れられる用意が足ったのだろうか。

第一章 尾張藩主徳川宗睦の名君像

さて、先述のような、尾張藩主宗睦は藩政改革を主に実施したが、藩政改革の理念は、藩主が行うべき職務であると理解された。
このページは、現在のところ読み解けません。
生残し者も家を失ひ親族に離れ、さぞ方にもわれたら。近くは里門の下まで溢れ来れば、歴々の士共も皆苦し

て御津を流し、人見弥右衛門と水野千之右衛門らをして治水に当たら、これによって以後洪水の被害はなく

ようになった。その「安民」の功績を特に称賛している。天

明の飢饉に際しても、「甚御心を懸し」、水野らに「窮民

の呼を命じ、「事急なるには直に米握飯給の類、金銀

銭、みなその軽重に随びて賜はり町医師共を四方に分ちて

病人を救はせ給ふ。かかりは两家をはじめ老衆及び

病の士である各家地の民を懸き救う者多かりけり」と、

余の土まで各采地の民を懸き救う者多くあり、

次に明君宗睦を称揚する面として、「稽德編附録」に「諫

入れ給ふ事誠にすみやかになることを挙げている。そ

にはいくつかの逸話も載せているが、ここでは人見

璃邑翁御側に在られしが、申上著るは、君は火

瘧に居給ふて寒気御存あるまじ。彼等も私共も未明

よけたお代に穂水所に島の居るを御覧じて、不図御弓を取寄

せ、射にかからせ給ふ。人見弥右衛門進出て、今日

よりより其場にさしかかりて、申上げにくき事にして、

又折角射留めんと思召して引込給ひて、共際にさ

置き給ふか、御供の衆への御見へもあしく、全体

御内心に尤成りと思召せども、さし止みがたき人

情なるに、直にやめ絵給ひて、君も君なり臣も臣な
明和四年水害について、『天保会記鈔本』によると、大水災は、御国民も大がたならざる難撃され、君。

提案したとあり、人見璃邑が宗睦に水の村々への巡回を

世子在国の年、一月、諸士の武芸を見送りに、

顔にねむらせ給ひける。御小納戸庵原新九郎守、

よくくにらに奉りしかば、其時、手水に立たせて

冷水をめられ、御面をあらばせられ、其後は眠り給

はさりき、其諏を納め給ふ事、此類多しとぞ。（108）

に、人見弥右衛門、君にもはしらせ給へ、と手を引

き参らせ、二度とおはせ給し、雪中を走らせ興じ給ひける

に、近臣に仰せて、雪中を走らせ興じ給ひける

をやするべし」とここに集約されているようし、

穂徳編附録で宗睦の論述を掲載した築地所で「人

者の塩を加えて、塩化してするか如し」と、宗睦を

唐太宗に、璃邑を微徳にぞらえるところにも明らかに

であろう、この璃邑の諏言を受け入れた明君像は宗睦の

みについて語られたのではなく、孝世子（治休）、昭世子（治興）

兄弟に同様の話が残されている。

『藩主の治世を讃歌し』（用国書箱）であったように、
もちろんそれは虚構された美談や物語としての側面が強く、そのまま史実として受け入れることはできない。我々がここで行なわなければならずのは、これらの物語史実を抽出するような作業ではない。ことで明らかとなるのは、「謡を入ることは『君臣合体』下情を知る」なった仁徳を宗緒や治休・治興兄弟が体得していたと語られ、それが美談とされたということである。明君宗緒像、璃邑・平洲・香山が要請した明君像そのものである。『吾民に崇拝される』、このような明君像が明君像、『神様』としていう、徹底的に自己規律する君主こそが、『神様』として、この明君像を宗緒ら領主層も同時に懐いていた、ということを意味するのである。

では、次に徹底的に自己規律する君主としての明君像を、どれほど領主層が自覚していたのかについて論じてみたい。そこで興味深いのが、次のエピソードである。

明和六年（二六九）八月四日、婚礼を済ませた第六代水戸藩主徳川治保が、その挨拶のために尾張藩市賀（市谷）藩邸を訪問した時のエピソードで、その傍に居合わせた主要人物は、水戸藩主徳川治休（二七五）一八〇七六、一四歳、兩之孫治休、治休の死後、世子となる、人見璃邑、四一歳、御部屋御庭足軽頭御小納戸兼、深田厚斎（治休の侍臣兼伴読）である。藩主宗緒は在国のため、年齢も近く、兄弟のように仲が良く、しばしば学談という。その治保が次のように語った。
御膳の中に、従従学術我等は嫌ひ、朱子学にてなら
べき政事実行の用に不立、異見之学も其理可有候
得共。学問の根の居り候上は可然候、未熟のうちは
疑惑出来候む不宜宜候、孟子の、君視臣如土芥、臣視
君如寇讒といふ語などを、異見の学は孟子を非り候
得共、孟子は人君を重く責申候而申らる事にて、如
土芥とて、臣たる者の実に寇讒の如く存する事にて、如
之候、人主の方の心得は、加様に存し畏れ候得ば、
おのづから身の慎になり、臣を視る事子の如くに成
申候、全体人君たる者はウカと心得候而は成不、
学而篇「道千乘之国」、章を講釈せし、「論語」中のこと
を食べたりという時間を挙み、深田厚齢を召して「論語」
のことなどにも話が広がり、その餘種々之御学問話にて、
水戸藩主徳川治保が従従学を嫌、
ために、大名はイナールモノに候、
と御怒ひ被遊候

ここに分かるのは、水戸藩主徳川治保が従従学を嫌い、
朱子学でなければ「政事実行の用」に立たぬと考えてい
たこと、そして君主は常に身を慎まなければならぬと
考えていたということである。孟子が「人君を重く責

職分むつかしきものにて、大名はイナールモノに候、
と御怒ひ被遊候

且中将様へ御答に、人主は下情を知らねばならぬ
事に候故、家中を交し頒分の民を懸むを、皆仁に在る
ことに候、余御啓共有之、五ツ比帰御被遊候。

事に候故、孟子は下情を知らねばならぬ

此事に候故、家中を交し頒分の民を懸むを、皆仁に在る
ことに候、余御啓共有之、五ツ比帰御被遊候。
共有され、時に彼らの間で伝達された君主としての理念でもあったのである。

以上の逸話は、明和六年のことなので、石川香山が登用され、細井平生が尾張に招聘されるよりずっと以前の話である。それだけ、尾張藩にはすでに香山や平生の君臣論を受け入れるだけの土壤が形成されていたことを意味する。最後に、それを補強する逸話を一つ引用しておきたい。

昭和子（治興）、嗣君に立たせられし後、従来の御短冊の間を、六畝と三畝と二畳の間、御座所の西に御作事命ぜられぬ。詩歌書画の類を御作付にせられ、自分逃遅ると号されし。故は、君臣の間で厳重にして、上下隔たりたるもか。此御間にて、下人同輩の御心にて親しく御物語をもなさされ、下情をもろしきされかくの思召にて、かく御事立てたる所比は、最早御病にかうろされ、さの様御間にて合もおはせし、逝去し給ひしとぞ。も。(100)

新世子治興は、君臣が「我人同輩の御心」で親しく御物語し、「下情をもろしろ」という目的のためである。この発想は、先述した石川香山の「下情ヲ尽シ知ラシメ」の考えや、田村平洋の考えと合わさり、治興が世子となるという点においてのみ、横の関係にするというのとは、下情を知る」という目的がある。ただ、安永二年（一七三三）六月十四日三の民間二置、民雑瀦セメノ合致する。たとえば、安永三年（一七四三）四月十一日のことで治興が亡くなるのが、同五年（一七六）七月十四日のことで治興が世子となるので、このエピソードは、一七四三～一七六年のことであり、やはり香山や平生の意見を受けて自分が逃遅を造ったのである。逆に、これは彼らの御論が受け入れられる用意があったことを表している。すなわち、それはこの逸話をちょうど香山が「釈義」を上梓したと同時期の出来事であったということだからも、
小結

ここまですでに長々と論じてきたので、最後に本論を要約しておきたい。すなわち第一章では、石川香山が人主の職で語った君主に対する理念と、『陸宣公全集』の改革を模索していた尾張藩の政治的状況を読むことができればある。基本的に一致しており、君にはそれを『忠良之臣』の言葉として受け止め、名君にはそれを『忠良之臣』の言葉として受け止め、名君に君を要請する。このように目的によって、香山は『釈義』を著した。そして、第二章では、人見織邑と細井平洲の思想を取りあげ、「賢臣」からの諫言に耳を傾け、「君臣合体」して改革に当たる「名君」出現の期待や、『釈義』という書名で最もよく知られ、秦議に彼が草した詔令を参考にしたが、『陸賛の奏議集』は一般的に『陸賛の奏議集』や『陸賛集』とも呼ばれ、陸賛が後世に高い評価を受けたのは、秦議集『陸賛の奏議集』や『陸賛集』とも呼ばれる。また、詔令単行本を『翰苑集』などと呼ぶ。陸賛が後世に高い評価を受けたのは、秦議集『陸賛の奏議集』や『陸賛集』とも呼ばれる。また、詔令単行本を『翰苑集』などと呼ぶ。陸賛が後世に高い評価を受けたのは、秦議集『陸賛の奏議集』や『陸賛集』とも呼ばれる。また、詔令単行本を『翰苑集』などと呼ぶ。